



Title	娜仁格日勒編著『梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』(国立民族学博物館調査報告130, 2015)
Author(s)	田中, 仁
Citation	日本とモンゴル. 2018, 52(2), p. 121-125
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(書評)

娜仁格日勒編著『梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』 (国立民族学博物館調査報告130, 2015)

田 中 仁

本書は、梅棹忠夫（1920～2010）の内モンゴル調査記録の学術的・今日的意義について、歴史学、民族学、民俗学、生態学、文化人類学などさまざまな領域のモンゴル人研究者7人による多角的・総合的な検証をまとめたものである。同書はまた日本・国立民族学博物館と中国・内モンゴル大学との共同研究プロジェクト「梅棹モンゴル研究資料の学術的利用」を母体とした国際共同研究の成果である。

梅棹は、初め動物学を専攻するが今西錦司率いる内モンゴルの学術調査に参加し民族学に転じた。1957年「文明の生態史観」を発表、生態系に基づいた多系統的な文明発展のパターンを示した世界史観は、従来の西欧式の単系統的な歴史観に大きな衝撃を与えた。国立民族学博物館の創設に尽力し74年初代館長に就任、93年まで館長を務めた。同館の「梅棹忠夫アーカイブズ」は、彼の生涯を通じた活動に関わる資料のほとんどすべてを網羅している。

1944～45年、彼は張家口にあった蒙古善隣協会・西北研究所の内モンゴル調査隊に加わり、遊牧民についての調査を担当した。調査範囲は、蒙古連合自治政府の支配地域であったチャハル盟とシリンゴル盟東西スニト旗に限定されていた。この調査で梅棹が作成した資料は、ノート8冊、野帳21冊、スケッチ約150枚にのぼる。

本書は、編著者・娜仁格日勒（ナランゲレル）による「序」「あとがきにかえて」と、「第一部 社会論」4篇、「第二部 牧畜論」4篇の論考から構成される（【1】～【8】は評者が付加した）。

第1部 社会論

- 【1】近代モンゴル社会に対する認識：梅棹認識の位置づけ（ウルゲディ・タイブン）
- 【2】東スニトの社会変容：生活に関する聞き取り調査の活用（娜仁格日勒）
- 【3】戦前期における〈草地売買〉：経済に関する聞き取り調査の活用（ガンバガナ）
- 【4】ラマ廟の社会的機能：宗教に関する聞き取り調査の活用（白莉莉）

第2部 牧畜論

- 【5】21世紀の遊牧離れ：梅棹図譜の意義（テクスバヤル）
- 【6】糞転がしをめぐる土着の知識：梅棹が調査できなかつたもの（ウルゲディ・タイブン）

【7】モンゴルの遊牧に関する梅棹忠夫の見解について：生態学の観点から（ナチンション
ホルG.U.）

【8】もうひとつの乳製品：梅棹が記録できなかったもの（ボルジギン・オルトナスト）

以下、各論考の梗概を記す。

【1】（ウルゲディ・タイプン）は、梅棹「西北研究所内蒙古調査隊報告」から彼の近代モンゴル社会認識と歴史認識を検討する。「報告」は、①モンゴルの牧畜を牧野・家畜・牧畜民の三位一体ととらえ、その社会は牧畜を中心に周到に組み立てられていると概括し、②シリングルに比して、チャハルでは漢人入植が牧民の環境と生活を破壊せず、蒙地を近代的牧業へ接近させたとする。これに対して筆者は、梅棹の認識がチャハルの実態の背後に存在する歴史的背景をふまえた理解ではないと異論を提示する。すなわち「漢人との接触による文明化」という言説は、20世紀初頭以降の「反漢意識」が近代モンゴル民族のアイデンティティを形成してきたモンゴル人の観点とは合致しない。

【2】（娜仁格日勒）は、梅棹アーカイブズと筆者自身による実態調査を照合して東スニトの社会変容を描写する。1940年代東スニトのモンゴル人は五種類の家畜を同時に所有し、豊かな自然が保たれた草原でほとんど何の束縛を受けずに移動放牧した。日常の衣食住は簡素であったが、畜産品で十分賄い、自給自足ができた。これに対して、今日の内モンゴルで牧畜が一番多く残っているとされる東スニトにおいても遊牧は消失し、定住牧畜や半移動牧畜に変わった。この間、漢人増加に起因する社会変容とともに、石炭開発会社は周辺の牧人たちに環境汚染と犬やビニールによる「三害」をもたらした。

【3】（ガンバガナ）は、シリングル盟を事例に戦前期内モンゴルにおける「草地売買」の実態とそれが近代内モンゴル社会に与えた影響を考察する。「草地売買」は戦前期内モンゴルでモンゴル人を相手とする漢人商業資本のもっとも基本的な活動形態であり、主に現地で行商する漢人商人によって支配されていた。1940年のホリシヤ制度施行によってモンゴル人の「草地売買」への参加が可能となり、その後数年の間に彼らは漢人商人と拮抗するまでに成長していったが、その背景にはモンゴル自治邦政府が政治の主導権を掌握していたことがあった。我々は梅棹アーカイブズからホリシヤのさまざまな実態について窺い知ることができる。

【4】（白莉莉）は梅棹の内モンゴル調査と筆者自身による実地調査を照合し、内モンゴルにおけるラマ廟の社会的機能の実態と変容を考究する。梅棹は、①ラマ廟は「生産力の低い牧畜社会において必然的にもたされる過剰人口の収容所である」とし、②遊牧する個々の牧民と固定ラマ廟の間に相互に強い依頼関係を持っているなど、その機能を肯定的にとらえた。今日のラマ廟の社会的機能について、筆者は、1980年代以降の内モンゴルにおける

るラマ廟復活においては、行政側の必要に応じて観光業の発展可能なものと直接経済的利益をもたらさないものとに分別される、すなわちラマ廟の復興は行政側の関わりによって大きく違っている。

【5】(テクスバヤル)は、内モンゴルの遊牧は共産主義のイデオロギーによる国家権力と遊牧文明を理解することができない漢民族の農耕思想に基づいた政治と政策によって人為的に破壊されたとし、結果、梅棹が現地調査でスケッチ・ブックに書いた「モンゴル遊牧図譜」は他に代え難い貴重な「遺産」となったと指摘する。モンゴル遊牧社会に古くから存在していた「ホト・イル共同体」は、「互助合作」から人民公社化にいたる集団化の過程で解体され、21世紀交には草原の「私有化」と「禁牧」の時代を迎えた。集団化のもとで進められた開墾と農耕用水の開発によって水源が枯渇し、さらに1990年代から勢いを増した鉱業開発による地下水の莫大な消耗と汚染が進んでいる。

【6】(ウルゲディ・タイプン)は、梅棹フィールド・ノートが糞転がしの存在とそれをステップという生態のなかに関連づけて筆記していたことをふまえて、草原の生態系、および土着の知識について論じる。筆者は、ステップでは「家畜→畜糞→糞虫→肥料→牧草→家畜→」の生態循環がくりかえされているとし、「このような生態系の認識は、遊牧民にとって遺伝的に領略される。遊牧民は、ある動物や植物のあり方を常に他の生き物と関連させて考える」と述べる。関連研究に対する梅棹の批判的見解を念頭におき、筆者は、草原の生態学研究においては「科学的な」知識だけで扱うことが困難な場合が多いとし、土着の知識と自然科学を対比し実用性の観点から評価すべきであると主張する。

【7】(ナチンションホルG.U.)は、梅棹が内モンゴル学術調査を通して提起していた①モンゴルの遊牧における移動、②家畜の採食と草原生産力の関係について論じる。内モンゴル調査当時の梅棹の見解は今日の生態学では二点とも修正されているが、大戦末期の情報の乏しさと異なる言語と思考により遊牧当事者との意思疎通が困難な状況のなかで貴重な情報を大量に入手したことを評価すべきである、とする。さらに草原生態系自身の持続性のみならず、その自然風土から派生した伝統文化の弱体化が危惧される今日的状況において、定量的データを用いた解明とともに、特定の風土と歴史の中で蓄積された現象の本質を見極めることも均しく重要であると指摘する。

乳製品を加工しそれを生活の糧にすることは牧畜社会の本質を支える重要な活動の一つであるが、モンゴル人は五種類の家畜の種類や季節の相違によってさまざまな乳製品を加工する製法・技術と加工体系を生み出し、それがモンゴル乳文化の形成に大きく寄与してきた。このことを梅棹は「乳は徹底的に利用される」と概括し、さらにモンゴル乳製品の研究は一般論の段階から民俗学的比較研究の段階に展開すべきであると提唱していた。【8】(ボルジギン・オルトナスト)は、チャハル部ショローン・フフ・ホショーで受け継がれている

トウドという乳製品の製造についてフィールド調査を行い、製造過程・性質および由来について考究する。

それでは本書に寄稿したモンゴル人研究者は、梅棹の内モンゴル調査をどのように評価し、検証しようとしているのであろうか。

第一に、20世紀なかば内モンゴル遊牧社会の実態を記録した学術資料である梅棹アーカイブズがモンゴル遊牧文化を記録した他に代え難い貴重な「遺産」である【5】と、極めて高い評価を与えていていることである。なぜなら、内モンゴル遊牧社会の特質【2】、ホリシヤ制度の実態【3】、ラマ廟の社会的機能【4】、遊牧図譜【5】、乳製品の調査と分類【8】など本書が提示する内モンゴル遊牧社会は、21世紀初頭にはすでに消滅して現実にその姿を見ることはできないからである。

第二に、内モンゴル遊牧社会を生態学的枠組みによって把握することである。それはモンゴルの牧畜を牧野・家畜・牧畜民の三位一体的関係としてとらえることにはかならないが【1】、本書では糞虫をめぐる生態循環【6】や遊牧における移動と草原生産力【7】に関する検討として論じている。またモンゴル遊牧社会を「ホト・イル共同体」と捉え【5】、その実態を草地売買【3】、ラマの社会的機能【4】、乳文化【8】から論究する。さらに、内モンゴル遊牧社会の生態学的理解から「ローカル知」の重要性が提示される。すなわち【6】では「科学的」知識と土着の知識との関係が、【8】では乳文化としての伝統的知識が、モンゴル遊牧社会内部の多様性と世界各地の遊牧文化との比較考究の有意性として提示される。

第三に、近代内モンゴルの捉え方、すなわち歴史認識と日本の関与についてである。梅棹は近代内モンゴル社会の発展を「漢人との接触による文明化」と捉え、こうした理解の前提に人民共和国の「民族区域自治」に対しても積極的に是認する。これに対して、【1】（ウルゲディ・タイブン）が20世紀初頭以降の「反漢意識」が近代モンゴル民族のアイデンティティを形成してきたモンゴル人の観点とは合致しないと述べ、また【5】（テクスバヤル）が内モンゴルの遊牧は共産主義のイデオロギーによる国家権力と遊牧文明を理解することができない漢民族の農耕思想に基づいた政治と政策によって人為的に破壊されたとするように、近代内モンゴルに関する梅棹の歴史認識に対する明確な異議が提示される。關鍵はモンゴル人としてのアイデンティティであり、【1】が「蒙古連合自治政府は独立政権であり、蒙古自治邦はほとんど独立国家の体制を立てていた」とするのは、モンゴル人がどのように政治の主体たりえたのかを基準として、しかるべき評価が与えられるべきであるということである。近代日本の関与に関するモンゴル自治邦政府とホリシヤ制度【3】、帝国の機関・学者（西北研究所や梅棹ら）による内モンゴル調査【5】、さらに教育・品種改良【1】【2】の評価もこうした尺度から整序される。

第四に、モンゴル社会の多様性と内モンゴルの今日的課題に関わる論点である。20世紀半ばのシリンゴルとチャハルの相違と段階差とする梅棹の理解に対して、【1】(ウルゲディ・タイブン)は、①モンゴルのさまざまな部族や地域は、それぞれの環境で生きていくうえで、生来よく遊牧生活の能力と牧畜技術を習得し、そこにはいろいろなバリエーションが生まれる；②各自の経験を通じて発達させた知識の活用があるため、変化や段階差が生じる柔軟性がある、という論点を対置する。また【5】(テクスバヤル)は、人民共和国・内モンゴル自治区で長い間指導的役割を果たしたウラーンフーが提起した「定居遊牧」政策がモンゴル社会の実態をふまえた立案であったことに言及する。急速な経済発展を実現してグローバル大国となった中国は、現在、1950年代に創設された諸制度のもと市民権の保障、国民形成の実質化如何が問われている。民族区域自治制度がこうした課題群の一つであることについては多言を要しない。本書は、この課題をモンゴル人の側から照射したとき、いかなる論点が存在するのかをクリアに提示している。

(たなか ひとし：大阪大学)